第3種郵便物認可 ● 2014.9.21(日) 朝日

四日市慰霊祭 市が共催

市長「公害の教訓忘れない」

大気汚染による四日市公害の犠牲者を悼む慰霊祭が20日、三重県四日市市であった。初めて市が共催に加わった。慰霊祭は、ぜんそく患者や遺族らで作る会が主催してきたが、高齢化が進み、存続が危ぶまれていた。市は「今後も継続して開催し、公害の教訓を伝えていきたい」としている。

患者や家族のほか、田中俊行市長、コンビナート企業の関係者らが参列した。今年は公害について学んだ市内の小学5年生6人も初めて参加し、「私たちの子どもたちにも語り継いでいきたいと思います」とメッセージを読み上げた。

慰霊碑に手を合わせる患者遺族の石田久美子さん（右）と患者の野田之一さん＝三重県四日市市松本

高度経済成長期、コンビナートから排出された煙で、住民がぜんそくなどになった四日市公害。慰霊祭は1977年からほぼ毎年開かれてきた。「四日市公害患者と家族の会」によると、当初の数年間は市長が参列したが、それ以降は市が慰霊祭に関わることはなくなっていったという。

だが、2011年には田中市長が市長として三十数年ぶりに慰霊祭に参加した。12年には四日市公害訴訟の判決から40年の式典を市が主催した。

慰霊祭の共催は会が市に持ちかけた。田中市長は「一人でも多くの市民が公害患者や家族の苦しみに思いをいたして、歴史や教訓を忘れないようにするため決めた」と話す。

四日市公害の記録を続けている沢井余志郎さん(86)は「公害を語り継いでいこうという行政の積極的な姿勢は、画期的なことだと思う」と語った。患者と家族の会の谷田輝子会長(80)は「若い世代には、公害の悲惨さと二度と起こしてはいけないということをもっと知ってもらいたい」と話した。（坂本進）

公害の教訓とは何でしょうか

市長が「公害患者や家族の苦しみに思いをいたして、歴史の教訓を忘れない」と表明しているのはとても大事な視点です。

たとえば、新しく開設する「公害と環境未来館」で、公害患者の苦しみ映像を流し、企業・行政が努力して、青い空がもどり現在の四日市がある。その後も公害防止技術の移転など四日市は環境先進都市としての役割を果たしている、と広報したとしましょう。

私は、それだけでは不十分だと思っています。「公害の教訓を伝える」というのは、単に努力の過程と現在の到達点（成果）を並べるだけでは、本当の教訓とはならないのです。

公害の教訓につながる歴史の実相をキチンとリアルに（恥ずかしいことも包み隠さず）表現しなければ（反省を率直に吐露しなくては）心打たないし、教訓にはならないと考えています。（萩森）